2001年度版ベストエッセイ集

# 新茶とアカシア

日本文藝家協会編

光村図書

2001年度版ベストエッセイ集

# 新茶とアカシア

日本文藝家協会編

光村図書

新茶とアカシア

二〇〇一年六月二十五日　第一刷発行

編　者——日本文藝家協会
発行者——常田　寛
発行所——光村図書出版株式会社
東京都品川区上大崎二-一九-九
郵便番号一四一-八六七五
電話〇三-三四九三-二一一一（代）
印刷所——株式会社加藤文明社
製本所——株式会社難波製本

©Nippon Bungeika Kyokai 2001 Printed in Japan
ISBN4-89528-098-5　C0095

価格はカバー・帯に表示してあります。
本書の無断複写（コピー）は禁じられています。
落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

# 新茶とアカシア　目　次

隠れたる名著　阿川弘之　10
漂泊民の血を受けて　金重明　14
百歳現役　岩橋邦枝　18
オフィス街の驟雨　高橋昌男　22
バナナは妖術使いである　嵐山光三郎　27
本物のヤモメ　古山高麗雄　30
二人の思い出　坂上弘　35
崖の坂道で　庄野潤三　40
三亀松と談志　吉川潮　43
二百人の劇場　別役実　50
こうやって人は死ぬんだ　司修　55
変な木　高田宏　58
職人魂の「唯物論」——ドレスデンを復興させたもの　山崎正和　62

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

オールドオールド　山本道子　67
乱詩事始　小林恭二　71
一日玄米四合の謎　松本健一　76
覆面　清水邦夫　80
夜鳥　佐伯一麦　83
圏外の歌の面白さ　大岡信　88
日本の赤　有吉玉青　92
マングース売り　又吉栄喜　96
米寿の死　原田康子　102
生きる　養老孟司　107
役者の寄り目　野田秀樹　112
銀杏が衣を脱ぐ時　三浦哲郎　117
アボリジニの魚　水木しげる　119

「崎戸のコスモス」のこと　川西政明　123
フレンチトースト　大庭みな子　128
空白恐怖症　石毛直道　132
万年筆・ヒゲ文字・音読　中野孝次　136
ぼくの日本語遍歴　リービ英雄　140
心残り　増田みず子　148
手のひらの装丁　原　研哉　153
守護霊　阿部牧郎　156
東京っ子　古井由吉　163
森鷗外はそんなに偉い人だったか　なだいなだ　168
ナショナリストは孤独である　川村　湊　172
沈黙　林　京子　177
真贋の森　白石一郎　182

人生を推敲する、ということ　佐々木幹郎　188
スヌーピーと靴ずれ　落合恵子　193
超現実主義の根　小川国夫　196
還暦浮浪児　池内紀　201
屋根に草花を植える　藤森照信　205
見えない梨の木　平出隆　209
墓参りは楽しい　新井満　214
オオカミを求めて　津島佑子　222
豆と寒天の面白さ　安岡章太郎　229
ごん太の浄瑠璃　石牟礼道子　232
九十一翁の呟き　南條範夫　237
トナカイ　野見山暁治　245
ローマでチラッとアベベ　横尾忠則　250

祖母のポケット　桃井かおり　254
心の変遷　日高敏隆　257
石榴と猫　馬場あき子　261
闇に消えた怪人　富岡多恵子　264
記憶　外岡秀俊　267
マッカーサー道路　松山巖　271
元祖モダンガール　ハルちゃん　島田歌穂　275
あれとこれとそれからと　黒井千次　280
春の香り　竹西寛子　286
一発勝負　小沢昭一　289
ケーキ　内館牧子　293
わがタイちゃん　新藤兼人　299
もう、秋か！　清水哲男　303

馬書蒐集始末　木下順二　308
私小説の力　秋山駿　312
「神の国」の翻訳　E・G・サイデンステッカー　317
老人の子供がえり　北杜夫　322
名文句を読む　川上弘美　327
新茶とアカシア　三木卓　331

題字＝横山　蒼鳳
装画＝矢野　昭雄
装幀＝加藤美貴子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

# 新茶とアカシア

# 隠れたる名著

阿川弘之

浅見淵さんの「昭和文壇側面史」（講談社文芸文庫）を読んで、実に面白かつた。文壇が、一国一城の変り者たちの、しのぎを削る舞台だつた時代のエピソードが、具体的に事細かに書いてある。例へば、谷崎潤一郎壮年の頃の暮しぶり――。

昭和十年前後、阪急沿線本山村の谷崎家へよく出入りして色んな御用を承り、潤一郎に重宝がられた原稿紙屋のくらさんといふ人がゐた。「春琴抄」発表が昭和八年、潤一郎と松子夫人が同棲生活に入つたのは九年である。その頃の某日、関西から帰つて来たくらさんが、浅見淵を訪ねて、

「驚きましたよ、谷崎サンは、スッカリ『春琴抄』そのままの生活をしてますヨ」

目をまるくして報告する。

「松子夫人が食事の時には、筒っぽの木綿着に黒い前垂れを締めて、うやうやしく大きな

盆に載せて食事を運び、食事中は、また給仕用の小さな盆を手にして下座の飯びつのそばに控えてるんですヨ。佐助ソックリですヨ」

くらさんの此の報告と並べて、著者は、宇野千代の伝へる逸話や、谷崎自身の自己を語る文章も引用してみせる。

「夫人は屏風で囲んだ座敷の中で、蒔絵の硯箱を前に何か物語風の草紙を手本にして、習字に余念が無い風であつたのに、潤一郎先生はその座敷のそとの廊下を、尻端折りの格好で雑巾がけをしていらした」との、世にも不思議な話を、つい最近、実見した人から聞いたといふのが宇野千代の残した一文であり、

「私は恋愛に関しては庶物崇拝教徒であり、ファナチックであり、ラジカルで生一本である……私は女を自分より上のものとして見る。自分の方から女を仰ぎ見る。それに値いする相手でなければ女とは思わない」

これが谷崎潤一郎「雪後庵夜話」の一節である。

ただし、人々の語り伝へる「世にも不思議な」状景が、実は右の、谷崎の女性観に基く一種の疑似生活で、松子夫人の方も「演出家のイメージ」を害はぬやう、懸命に努めてゐたらしいと、浅見さんは解説してゐる。

無類の文壇通、文壇好きだつたが、浅見淵がほんたうに兄事し親しんでゐたのは、谷崎潤一郎より、同じ八王子に住む瀧井孝作であつた。

ある年の、瀧井の「芥川賞選評」を、浅見さんは同感の筆致で紹介する。

「大体に、此頃雑誌の小説は低い感じのものが多いが、とにかくこの高いリズムのある作品は、推称に価すると思つた。今回の候補作品の中では、『天上の花』が図抜けて佳かつた」

さうして話は三好達治のことに及ぶ。何故なら、瀧井委員の強い推挽を受けながら芥川賞を受賞しなかつた萩原葉子さんの「天上の花」は、三好達治を描いたものだつたから。

穏和な抒情詩人のやうに一般に見做されてゐる三好達治に、激越な一面があつた。達治の最初の奥さんは、佐藤春夫の姪にあたる。ある日、それに関連するある事情で、雨の中、三好家へ忠告にやつて来た春夫を、達治が目ざとく見つけて「私生活に干渉する」と激怒した。ざあざあ降りの庭へ、新夫人の嫁入り道具、片つ端から投げつけて大先輩の佐藤春夫を追ひ返すといふ「凄まじい光景」が演じられたと、これも原稿紙屋のくらさんからの伝聞ださうである。

以上、「昭和文壇側面史」のほんの一部分。全体を読み終つて「これは隠れたる名著だ」

と感心した。二十七年前に亡くなつた私小説作家浅見淵の名前を知る読者人は、もはや数が限られてゐる。したがつて、たまに著書が復刻されても本屋が置かうとしない。わが家の近くの駅前書店へ此の種の「名著」を探しに行つたら、無駄足になるだけである。文庫の棚では、今評判の作家の、時流に合つた、一般受けする小説ばかりがはばを利かせてゐる。

本屋も商売だから、狭いスペースに、売れ足の早い人のものを優先させて置くのは止むを得ないことだらうが、忘れられた文学作品の中に、何とも言へず面白い、滋味あふれるものが沢山あるのですよ。「昭和文壇側面史」とめぐり逢へて、つくづくさう思つた。

講談社文庫と別の、講談社文芸文庫が、一応採算を度外視して、純文学系のかういふ隠れた秀作を次々刊行し、品切れ絶版にならぬやう努力してゐるけれど、その文芸文庫自体、取り揃へてゐる本屋は、首都圏で八重洲ブックセンター、新宿の紀伊國屋書店ほか数軒しか無い。

商売と言つても、本屋の場合、一般の商品を扱ふのと少し趣がちがふだらう。今どき無理な註文かも知れないが、自分たちはグーテンベルク以来の活字文化の伝達者、「高いリズムのある」日本近代文学の伝統の灯を消すやうなことはしないといふ使命感を、書店経営者に僅かでも持つてゐてもらひたい気がするのである。

あがわ・ひろゆき（作家）「文藝春秋」十月号

# 漂泊民の血を受けて

金　重明

玄界灘の西に浮かぶ韓国最大の島、済州島（チェジュウド）で父は生まれ、東京の下町でわたしは生まれた。

父は十数年前に急死したが、死の直前まで、故郷である済州島に帰って住むのだ、と口癖のように言っていた。父が済州島で暮らしていたのはその人生の四分の一ほどにすぎないが、父にとって済州島は生涯忘れることのできない夢の地であった。

一方わたしはというと、生まれた場所は確かに東京なのだが、故郷に対する愛着のようなものはまったくない。子供の頃の記憶といえば、たとえばメタンガスがプクンプクンと浮き上がってきていつも雨が降っているかのように丸い水紋で覆われている真っ黒な川とか、大雨が降れば必ず床下浸水に見舞われた木造の家、といったものばかりだ。

済州島にはときどき出かけるが、漢拏山（ハルラサン）の伏流水が湧き出した澄みきった川や、群れ遊



此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com